

「釈迦」の言葉

鷲尾 博子

真つ先にタラップを降りてきたその人は地上に降り立つと振り返ることなく到着ロビーに向かって足早に歩く。後に続く人たちとの距離はますます広がっていく。法衣の上に三宅一生の黒いコートをまとい、片手で胸元を抑えながら舞い上がる冷たい風にきりつと顔を上げ、まっすぐに歩いて行った。空港のロビーのガラス越しに見ていた私のはるか前方を横切つて敢然と歩くその姿は先生そのものだと思えた。今から四〇年も前のことだ。

「犀の角のようにただ独り歩め」。後にこの言葉を聞いた時、私はあの時の先生の姿を思い出した。これは『スッタニパータ』という法話集に記載されている出家者に向けた釈迦の言葉である。全文は流麗な詩のように美しい。この

言葉を知ったのは、『釈迦』という本の中だった。八〇歳の釈迦が涅槃に至る最後の旅を八〇歳の先生が書き上げた。「この世は苦である」というのに、「この世は美しい人の命は甘美なものだ。」とは。本の帯にあるこの何とも心地よさそうな響しい響きに引き寄せられた。ここにはブッダの弟子たちの壮絶な苦の物語も描かれていた。とりわけウツパラヴァンナーという、阿羅漢となつた高德の尼僧の死が心に残った。托鉢からの帰りに、謀反を起こしたデーヴァダッタの弟子たちによつて撲殺されていた。死は生きたことの最後の結果ではないのだと私には思え、妹の死を思つて少し救われた気がした。「この世は美しい。」というブッダの言葉には、生きるものへの限らない慈しみを

感じて心が震えた。

一昨年の冬、夫をなくした。部屋の中は変わらないのに、姿も声もなく、気配もしない。過ぎてきた歳月が、突然現れた彗星にさらわれていったかのように離れ去り、現実だったのかさえ分からなくなってしまう。刹那にみた夢あるいは幻ではなかったか。方位磁石がぐるぐると回っている場所にひとり置いて行かれたようだった。

春のお彼岸になって、Y市でのお墓参りの帰り道、暮れていこうとする陽の光を追いかけるように西へ西へと車を走らせていた時のこと。オレンジ色に染まりかけた車の中でふいに、好きだったという感情が懐かしさを伴って滲み出てきた。年に三度のお墓参りは三〇年余り続いていた。隣の助手席に夫がいて、お喋りではなかったけれど家族のこと、仕事のこと、たわいのない話をしながら、運転する私がスピードを出し過ぎないよう、眠くならないよう、ずっと起きてくれていた。その時間、その空間が好きだった。幻ではなく、確かに存在したことだった。「愛する者と別れなかった人間など一人だっていやしないのだよ」。受け入れがたい死に直面して、誰もが迷い惑う。

「人は死ぬ前に一生分の過去を一瞬に一挙に思い浮かべ

る」という。よく似たことがじわじわと現れる。思い違えていたこと、相手の真情、起きていた事態、想いに応えられなかったこと、分からずにやり過ぎてしまった数々の言葉。たいていのことに悔いを伴う。けれど多くの相手がもうこの世にはいない。愚かにも後悔ばかりしている。また『釈迦』が読みたくなって先生の本を開いた。美しく、思慮深く、豊かな言葉に満ち溢れている宝箱のようだ。先生はブッダの人間らしいところが好きだと話していた。先生は弟子のアーナンダを通してブッダに問う。

「世尊にも後悔などがありでしょうか。」

ブッダは答えている。

「私は常に後悔ばかりしている。後悔の数だけ懺悔している——」。

「凡夫は死ぬまで迷妄の凡夫だ。」

『釈迦』はブッダという人間の物語だ。釈迦入滅の後、「結集」の場面でアーナンダは釈迦の言葉を伝える。

「私はこのように聞いた。世尊のお言葉のままである。

—— この世は美しい

人の命は甘美なものだ——」

生きて行く人間への讃歌のように聞こえてくる。